執着攻めと平凡受けの短編集1

Matsumoto

執着攻めと平凡受けの短編集 1

箱庭の中に楽園 ---------- 02

バタフライエフェクト ---------- 21

ティンダロスの猟犬 ---------- 41

パブロフの犬 ---------- 71

シャンタク鳥 ---------- 88

くらいところにすむけもの ---------- 99

シュレディンガーの猫 ---------- 111

箱庭の中に楽園

Paradise in the miniature garden

その選択が、俺の人生のまさしく岐路だったと言えよう。

「ペットと愛人、好きな方を選べ」

お前達に選ばせてやる、と肥えた男は言った。

男の言葉が黒塗りの床にべしゃりと落ちる。ひっひっひと耳障りな声で笑う男の歯は、黄ばんだ上に所々が溶けたように欠けている。

男の言葉に、え?と小さな声で戸惑った様に聞き返した俺の片割れ。

片割れの目には真珠のような涙が溜まり、瞬きするたびそれが目尻から次々と零れ落ちて頬を伝う。

「俺の愛人になるか、犬になるか、お前達に選ばせてやるって言ってるんだ」

男は床の上でカタカタと震える片割れに向かって、にたりと笑う。

「借金のカタに売られたお前達には、過ぎた扱いだろ」

もっと泣いて喜べよ。

男の手が俺の前髪を掴んで、そのまま体ごと床の上を引きずり回した後、まるでゴミを捨てるみたいに放り投げる。

掴まれた前髪が、引きずられた体が、角張ったテーブルにぶつけた背中がひどく痛むけれど、泣くほどではないなと思う俺の目からは、片割れのような真珠は生まれず、それがまた気に入らないとばかりに男は俺の背中を踏みつけて、クソ忌々しいな、と吐き付けるように零す。

ヒクヒク泣いている片割れは、俺の惨状を横目でチラリと見たが、助けるつもりなど微塵も無い素振りで哀れっぽく振る舞い、俺と同じ災いが自分の身に降り掛かるのを必死で避けようと小芝居を打っている。

広くもないが、かといって狭いわけでもない部屋にあるのは、黒塗りのテーブルとソファ、そして肥えた男と俺と俺の片割れ、更には壁に凭れて此方を興味無さげに見つめる——黒いスーツに身を包んだ、ぞっとするぐらい美しい男という四人の人間。

目の前に立つ肥えた男は、俺たち双子を生んだくそ女が金を借りた相手で、俺たちは女がその借りた金を返す目処が立たない為に、男へ売られたいわゆる借金のカタというやつだった。

見目の良い片割れと、その片割れとは似ても似つかぬ凡庸な容姿をした俺。
片親で育てるには食費も学費も嵩む金食い虫の男の双子。そんな俺たち二人を水商売をして食わせていた女は、母というよりは雌だった。奴は男と見れば尻尾を振って纏わり付き、家に連れ込んでは腰を振り、そして最後には散々金も体も貪られて捨てられる、どうしようもない女だった。
頭と尻は軽いが、それでも俺たちを一応ながらにも育てていく気はあるらしかった女。その女をいとも簡単に手玉に取り、水商売より更に濁ったヘドロの泡へと沈めた、女の"彼氏"だという優男。
優男は我が物顔で俺らの家に入り浸り、女に金をせびっては俺にタバコの火を押し付けてニヤニヤ笑う。
お前らはホントどうしようもねえな。
優男は笑いながら俺たちに向かって、そう吐き捨てる。
タバコの火が背中の皮膚を焼いて、辺りに何とも言えない匂いが立ちこめる。その匂いに気付かぬ振りをするずる賢い片割れと、本当に何も気付かない馬鹿でどうしようもない女。
水商売からソープへと仕事場を変えた女。家に入り浸る女の彼氏である優男。優男から少しでも離れようと深夜まで家に帰り付かぬ俺と片割れ。

何も変わらぬ膿んだような日々は、永遠に続くかと思われた。なのにそれがまさかあんなに簡単に崩れさるとは、思ってもみなかった。

時計の短針が頂点に差し掛かる時間に家に帰り着いた俺。

いつも通り音を立てないように開いたドアの向こう側で待ち構えていたのは、黒光りする靴を履いた物々しい男達だった。

いつもは我が物顔でリビングのソファに横たわる優男が、顔の原型が分からないぐらい殴られ、血溜まりに横たわっている。そしていつもは自分の部屋に閉じこもって勉強ばかりしている片割れが、部屋から引きずり出されたのか、リビングの隅で小さくなって震えている。

狭いリビングには黒服の男が五人、靴も脱がずに立ちはだかっている。

今日は風呂屋も休みなので自宅に居るはずの女がおらず、居るはずの無い見知らぬ男達が我が物顔で居座る光景は、どこか現実味に欠けていて俺を戸惑わせる。

「お前が出来損ないの方か」

ドアに手をかけたまま立ちすくむ俺に向かって、肥えた男が部屋の中央でニヤニヤと黄色い歯をむき出しにして笑う。

男がさっと視線を走らせると、部屋の隅に居たらしい黒服の男が俺の首を掴んで、有無

を言わせず床に引きずり倒す。倒された床の目と鼻の先に、血溜まりに浸かる優男の姿がある。

「この男が作った借金の連帯保証人が誰か分かるか？」

肥えた男が、血溜まりに沈む優男に唾を吐きかけながら、美しい折り目で三つ折りにされた白い紙を俺の目の前にちらつかせる。

開かれた白い紙の内側には、見慣れた字でこの場には居ない女の名前が記入されている。

尻と頭の軽いどうしようもない女。母というよりかは雌と呼ぶに相応しい、男に縋り付いて生きる女。その女の名前の記入された白い、白い用紙。皆まで言われずとも分かる、そこに記されたその名前こそが、目の前で笑う肥えた男の問う、連帯保証人の名前だということが。

「あのくそ女」

俺の喉から漏れる低い呪詛を溶かしたような声に、リビングの壁にもたれて興味無さそうな顔をして事の成り行きを見守っていた男が視線を上げる。

肥えた男を除いた残りの四人のうち、暴力ばかりを食って生きていると言わんばかりの屈強な体躯を持つ男たち3人とは、一線を画した容姿をした黒ずくめの男。

滑らかな乳白色の肌と、墨を流し込んだような深い黒をした髪と瞳を持つその男は、一度見れば忘れられぬほど美しい顔立ちをしている。その男のさも退屈だと言わんばかりの

瞳が、僅かに興味を持ったように瞬く。
「出来損ないでも、現状把握ぐらいはまともにできるようだな」
此処には居ない女と、その女の名前が書かれた用紙と連帯保証人という言葉。血溜まりに沈められた男と、その男の情人だった女。小学生でも分かるクソみたいな問いの答えは、
「じゃあ俺が言いたい事も分かるよな？クソみたいに逃げたクソ女のツケはお前らが払うんだよ」
やはりこれ以上無いぐらいクソッタレたものだった。
分かったか？クソガキ共。
俺に向かって肥えた男が、忌々しげにそう吐き捨てる。その男の向こう側で、ぞっとするほど美しい男が、俺を真っ直ぐに見つめてほんの僅かに唇の端を持ち上げるのが見えた。

今後の話をするために、場所を変えるぞ。
俺たち双子に向かってそう吐き捨てた肥えた男は、そのまま部屋の隅に控えていた男達に視線を送る。それを受けた男達によって、俺と片割れはボックスカーにぶち込まれて、この黒塗りの部屋まで引っ立てられた。血溜まりに沈んでいた優男は、俺たちと同じ車には乗せられず、別の車へ引きずり込まれていった。車のドアが閉まるギリギリに見えた、優男の絶望で塗りつぶされた瞳。

董が立ちすぎてるから、バラしても大した金にはならねえな。
優男を飲み込んだ車のドアが閉まった後、肥えた男は詰まらなそうな声を辺りに響かせる。
詰まらなさそうな、どうでもよさそうな、そんな響きでもって男の口から漏れ出たその言葉の孕む、残酷な意味に気付いた片割れが、移動中から今に至るまでずっと、大げさなぐらいガタガタと体を震わせている。

嫌だ、死にたく無い。ママ、どうして。震えながら、片割れが小さな声で呟いたその言葉に、別の意味で体を震わせる俺。
これほどまでにあからさまに裏切られて、捨てられたあの女に、どうしたもこうしたもないだろう。俺の様に憎しみを覚えるならまだしも、裏切られたことに涙をこぼすなんて、愚かしいにも程がある。あのクソ女は"ママ"などではなく、ただの"女"でしかないことを、この片割れは未だに理解していなかったようだ。
クソ馬鹿馬鹿しいし、クソ忌々しい。
時折思い出したように女が与える気まぐれな愛情に縋る、愚かな片割れ。ママからのプレゼントだよ、と渡される物を選ぶのは、いつだって片割れの方だった。18年間生きて来た中で、片手で足りるくらいの回数だけ贈られた、誕生日プレゼントにクリスマスプレ

ゼント、女がヤツの"彼氏"と出かけた旅先での土産に、水商売の客から貰った高級菓子。はい、どうぞ。そう言って女が手渡し、選択させるのはいつだって片割れで、俺はその後のおこぼれに預かるだけで、女から直接何かを与えられるということはなかった。

しかしそれもそうだろう。俺と片割れは、同じ女から同時に膿まれた同胞（はらから）だと言うにも拘らず、その出来には天と地ほどの差があるのだから、女がそう振る舞うのも当然のことだと言える。

お前が出来損ないの方か。

先ほど肥えた男が言った言葉が、俺たち二人の関係を端的に表している。

片割れが優秀な方、そして俺が出来損ないの方。頭の出来も、容姿も何もかもが出来損ないなのが俺。だから優秀な片割れには気まぐれには与えられていた女の愛情とやらも、俺には欠片も与えられたことが無いのは当たり前のことだった。

あの優男より若い俺たちは、バラバラになったら優男より少しは高く売れるのだろうか。

震える片割れと、その片割れの横でそんな詮無い事を考えていた俺。

押し込まれるように連れてこられた、黒で塗り潰されたこの部屋に居るのは、俺たち双子と、肥えた男、そしてぞっとするほど美しい男の四人だけだ。

ガタイの良い男達は部屋には入らず、けれどドアの外側で身じろぎもせずに待っている。
黒い床の上に蹲る俺たちの上から下まで、舐めるような視線を往復させた肥えた男。その男が零した言葉。それこそが、俺の運命を決める最後の選択肢だった。
「お前達に、選ばせてやる」
ペットと愛人、好きな方を選べ。
男の言葉に、え？と小さな声で戸惑った様に聞き返した俺の片割れ。片割れの目には真珠のような涙が溜まり、瞬きするたびそれが目尻から次々と零れ落ちて頬を伝う。
「俺の愛人になるか、犬になるか、お前達に選ばせてやるって言ってるんだ」
男は床の上で未だに震え続ける片割れに向かって、にたりと笑う。
「借金のカタに売られたお前達には、過ぎた扱いだろ」
もっと泣いて喜べよ。
男の手が俺の前髪を掴んで、そのまま体ごと床の上を引きずり回した後、まるでゴミを捨てるみたいに放り投げる。
掴まれた前髪が、引きずられた体が、角張ったテーブルにぶつけた背中がひどく痛むけれど、泣くほどではないなと思う俺の目からは、片割れのような真珠は生まれず、それがまた気に入らないとばかりに男は俺の背中を踏みつけて、クソ忌々しいな、と吐き付けるように零す。

ヒクヒク泣いている片割れは、俺の惨状を横目でチラリと見たが、助けるつもりなど微塵も無い素振りで哀れっぽく振る舞い、俺と同じ災いが自分の身に降り掛かるのを必死で避けようと小芝居を打っている。

広くもないが、かといって狭いわけでもない部屋にあるのは、黒塗りのテーブルとソファ、そして肥えた男と俺と俺の片割れ、更には壁に凭れて此方を興味無さげに見つめる――黒いスーツに身を包んだ、ぞっとするぐらい美しい男という四人の人間。

この血なまぐさい場に相応しからぬあの美しい男は一体誰なのだろうか。

男の足を背中に感じながら、視線の先にいる男の事を考える。

造形の美しさから言えば、この肥え太った男の"愛人"とやらが妥当だろう。だがしかし、男の此方を見る黒々とした瞳の奥に見え隠れする深い闇は、愛人というよりも、死神といった方がより相応しいとすら思えるほど、昏く澱みきっている。

男の正体が一体何者なのか気にはかかる。けれどそれもどうせ直に無くなる命ならば、そんな事気にした所でどうにもならないだろう。

愛人であれ死神であれ、俺にとって関係のない人間だということには変わらない。

美しい男をチラチラと気にしながらも、片割れは与えられた選択肢のうち、どちらがマ

シか必死で考えているようだ。無意識に唇を舐める仕草をする時の片割れの頭の中にあるのは、いつだって自分の利だけで、他の事など何一つとして無い。

人ひとりをバラすのに、大した金にならないとのたまう男がちらつかせる選択肢だ。どちらを選んでも待っているのは地獄だということに、この頭は良いが自分勝手な片割れはまだ気がつかないらしい。

あい、とまで口にして、いや、やっぱり、と訂正する片割れ。やっぱり、ペッ、でも、いや、そっちじゃなくて。小さな声でぼそぼそ呟く片割れに、肥えた男は俺の背から足を外すと、ああ?と低い声を発して片割れの元へ詰め寄っていく。

男の声に、ひっと息を呑む片割れ。ガタガタ震える片割れを上から見下ろすように見る肥えた男。その男の視線が、片割れの上から下までをもう一度舐めるように這ってゆく。

片割れが必死になって考えているその傍ら、床に伏せたまま何の反応も示さない俺を、壁にもたれた美しい男がじっと見つめている。

男の視線には、まるで底なしの闇のような昏い靄が纏わり付いている。人を搦め捕って、堕落させるような、そんな、ともすれば色香のような靄を纏う男の視線。それに呑まれそうになった俺は、男から視線を外して、片割れの方へと戻す。

「愛人が、いい、です」

今にも消えそうなほど小さな声で、肥えた男に答えを返す片割れ。その言葉に肥えた男

と、そして何故か俺の方へと近づいて来た美しい男の両方が、唇を吊り上げて笑う。
カツカツと音を立てて床を弾く男の革靴が、倒れたままの俺の目の前でぴたりと止まる。
「ねえ、君は？」
止まった革靴の歌声の代わりに聞こえたのは、ぞっとするほど美しい男のものであろう深みのある声だ。
「は？」
男はほんの僅かに膝を曲げると、そのまま手を伸ばして俺の髪を、先ほど肥えた男が俺のそれを掴んだときより更に強い力で掴んで、引きずり上げる。
ぐっ。俺の息を呑む間抜けな音が、静まり返ったフロアに落ちる。そんな俺になど構う素振りも見せずに、男は筋肉など無いように見える肢体からは想像も付かないほど強い力で、俺を掴み上げて無理矢理顔を上げさせる。
「ねえ、君は？」
片手で俺を掴み上げて、視線を再び無理矢理合わせる男は、唇を吊り上げて、
君はどちらがいいですか？
俺を掴み上げているとは思えないほど平坦な声で、俺に向かって問いかける。
俺たちのやり取りを、肥えた男が何故だか神妙な顔をして見つめ、そしてその更に奥では俺の片割れが、固唾をのんで見守っている。目の前の美しい男、そしてその奥の肥えた

男と俺の片割れの三人の視線に晒されながら口を開く俺。
そんな俺が返した答えを受けて、目の前の男が満足げに頷き、嗤う。
「俺に選択肢なんかないだろ」
そうですね。
俺の答えに、男が頷きながら場に似つかわしく無い穏やかな声で、では決まりましたね、と小さく返す。
あちらの彼がこの男の愛人。
美しい男は俺の片割れを見ながら、その隣に立つ肥えた男を、この男、と指し示す。
指された男は、片割れを見ながらにやりと唇の端を歪めて笑い、その笑みを見て片割れは顔色を青ざめさせる。
絶望を溶かしたような片割れの表情。その表情に欠片も興味を示した素振りの無い美しい男は、そのまま、
「そして君が、――僕のペットです」
片手で俺を掴み上げたまま、可愛がってあげますね、そう言ってうっそりとした笑みを零す。
「えっ、」
部屋の隅で息をひそめて事の成り行きを見守っていた片割れが、男の決定に小さく声を

漏らす。思わず漏れてしまったかのような、小さな小さな声。それに眉を顰める肥えた男と、欠片も表情を変える事の無い美しい男。

男の俺の髪を掴む手とは逆の手が、俺の首回りを意味ありげに撫でる。何かを計るような仕草に、皮膚がぞわりと粟立つ。

「ぼ、僕、やっぱりペットが、」

男の手の感覚から逃れたくて、首をフイと横にして顔を背ける俺。その俺の行動にあからさまに顔を青ざめさせる肥えた男と、ほんの僅かにだが口元を吊り上げる美しい男。男は自分の手から逃れようとした俺を、嗤いながら再び掴み上げて、無理矢理自分と視線を交わらせる。

俺たちのやり取りを顔を青ざめさせたまま、食い入る様にして見つめる肥えた男。そして俺を掴み上げる男に懇願するように口を開く俺の片割れ。

肥えた男の愛人と、美しい男のペット。そのどちらかを選ばなければならないのならば、美しい男にかしずく方がまだマシだとでも思ったのか、片割れは美しい男の足下へ這う様にして近づいてくる。その片割れの行動を、何故か肥えた男が顔色を紙の様に白くして凝視している。ごくり、と誰かの喉が鳴る音が聞こえかと思ったら、その音を掻き消すほど大きな衝突音が部屋に響く。そしてそれに続いて聞こえる、ざり、だか、ごり、だか、そんな何かが磨り潰れるような音。

音の出所を視線で辿る俺。未だ美しい男によって髪を掴み上げられているために、視線しか自由にならないのが酷くもどかしい。

辿った視線の先から、うう、と呻くような声が聞こえる。呻き声の主は、他でもない俺の片割れで、その片割れの頭に曇り一つない黒の革靴を乗せて、思う様力を込めていたのは、俺を何でもない顔で掴み上げている目の前の、この男だ。

右手で俺掴み上げ、右足で俺の片割れを踏みつける美しい男。

男の眉が微かに顰められ、視線が部屋の中央で立ち尽くす肥えた男の元へ向けられる。視線を受けた肥えた男は、ビクリと震えて顔を更に白くする。

「ペットの躾がなっていませんね、榊」

抑揚のない静かな声音で告げられた言葉に、榊と呼ばれた肥えた男は、申し訳ございません、と体を震わせて腰を九十度に折り曲げ頭を下げる。

なん、で。

男の足下でまだ懲りていないらしい――もしくは、未だにこの現状を正確に把握していないらしい片割れが、呻きながらも自分を踏みつける美しい男の足に縋り付き、

「僕は貴方の」

ペットになりたいんです。

そう哀れっぽく口を開く。その片割れの得意とする哀れさを滲ませた表情と声。かわい

げが無いと扱き下ろされる俺とは違い、世渡りの上手い片割れがよく使うその常套手段は、いつだって周囲の者の心に付け込んで、時に結論を、あるいは過程を、自分の良い様に捩じ曲げて来た。

見目も頭も良い片割れ。今までは片割れが望めば大抵の事は、その通りになってきた。だから今回もいつも通り上手く行くだろう。周囲に甘やかされてきた片割れが、今回のケースもそう考えるのも無理からぬことだった。

だが、それがいかに愚かな考えなのか、未だに理解していない片割れに降り注いだ言葉は、片割れの体を竦ませ、肥えた男を震わせ、俺の背筋に冷たい汗を流させる。

「家畜の分際が、誰に向かって口をきいている」

氷の様に冷たい声が、黒塗りの床に落ちて割れ広がる。ぞっとするようなその声音に、片割れがひぃ、と小さく悲鳴をあげる。

「榊」

男が肥えた男を呼び、この駄犬にきちんと躾を施しなさい、片割れの頭を踏みつけたまま、そうのたまう。

「覚えが悪いようならその時は――分かっていますね？」

男は榊と呼ばれる肥えた男に語りかける口ぶりで、その実視線は冷たく片割れに向けてそう口を開く。

まだ若いから、色々と使い道はあるでしょう。沈めるもよし、バラすもよし。方法は榊、貴方に任せます。

氷のように凍てついた男の言葉にみっともなく震える片割れ。その片割れを肥えた男が部屋の片隅へと引きずって行く。

「君も選択を変えますか？」

今なら望みを叶えて差し上げますよ。

首を微かに傾けて、俺の目を覗き込むように見つめる美しい男。

「どっちを選んだって、同じだろ」

その男に向かって吐き捨てる俺に、男は薄い唇を歪めて嗤う。

愛人にしろ、ペットにしろ、選んだ瞬間、地獄に落ちることに代わりはない。

「いいでしょう、なら君は僕のペットのままです――これ以上無いぐらい、可愛がって差し上げますよ。

君の首元を飾る鈴を用意しないといけませんね。

男は唇の端を緩く吊り上げて、俺の首周りに指を這わせる。

肌をまるで舐める様に這う指の感触が不快で、フイと体を逃がす俺を美しい男は愉快そ

うに見つめている。先ほどの、弁えぬなら処分せよ、と俺の片割れに向けた氷のような視線とは、打って変わったそれ。愉しくて仕方がない、そんな風にさえ映る男の表情に、訝しげな視線を送る俺。

「愛猫家のモットーをご存知ですか？」

そんな俺の顎を、男はすらりと伸びた指で掴み、無理矢理自分に視線を向させにこりと嗤う。

知るわけ無いだろう、そんなどうでも良い事。

口には出さずとも、俺が浮かべる表情で何を思っているのかを読み取ったらしい男は、俺のその態度を目を細めて見つめている。

親指と人差し指で掴んだ俺の顎のすぐ下、喉元の辺りを空いてる薬指でくすぐる様に撫でる男は、俺を本当の猫かなにかと勘違いしているのではないだろうか。

「やめろ」

むずかるように首を振って指から逃れようとする俺を、強引に――けれどそうとは欠片も見えぬ手つきで押さえつけた男は、この世の愉悦を溶かしきったような声音を、囁く様に零す。

「爪を立てられても、噛まれても、とにかく可愛がる」

それが愛猫家のモットーなんですよ。だから君が僕を嫌おうが、憎もうが、そんなこと

僕にとっては些細な事なんです。
飢えた眼をする君に溺れるぐらいの愛情を与えたら、どんな眼になるのか気になって仕方が無くて。
だから――文字通り、"猫可愛がり"してあげますよ。

俺の髪を片手で掴み上げて無理矢理引きずり上げたのと同じ手で、喉元をくすぐるように撫でる男。その男の瞳に沈む深い闇が、男が瞬くたびに少しずつ零れ出して、俺の足下を浸してゆくようだ。誰とも分かり合えないと思っていたどうしようもない孤独。それと良く似た匂いを放つ闇。いずれ俺はこの闇に呑まれて、跡形も無く消えて行くのだろうか。それとも闇と同化して、違うものになるのだろうか。
「まずは君に似合いの首輪を誂える所から始めましょうか」
どれにするかは、君に選ばせてあげますよ。それにどれを選んでも、きっと君にはよく似合う。
男が甘い声で俺に囁く。
どれを選んでも、きっと君には、

（その選択が、俺の人生のまさしく岐路だったと言えよう。）

バタフライ エフェクト

Butterfly Effect

本文
中略

男によっていつもぐちゃぐちゃに犯されるところを、俺に知らしめるように、そしてまたいつもの夜を思い出させるように、薬指でカリカリと引っ掻く。

肌に張り付くようなスーツの布地の上から与えられた刺激に、びくりと身を振るわせた俺。

慌てて足を閉じようとするものの、男の足の上に横抱きにされ既に男の手の侵入を許してしまっているいるがために、閉じた足の間で男の指がうごめくさまが分かって、首筋の裏側がぞくりと泡立つ。

股の奥から手前へと男の美しい手が滑り、つるりとした布が、肌に張り付く。

「おいたをできないようにしておいて、よかったですね」

少し身をかがめて、耳朶に直接吹き込むようにして囁かれた言葉が指し示す事柄に思い当たった俺が、身をよじった振動でカチャリと小さな音がなる。

喉元で鳴る耳障りな音とよく似たそれ。その音の出どころを思い描いて、身体を固くした俺。そんな俺などお構いなしに、布をまとわせた指が“俺自身”をなぞりあげる。びくりと再び身を振るわせた俺の耳元に唇をつけて、あまり動くと知られてしまいますよ、と囁き、そのまま舌を耳の中へ滑らせて、男は耳の中を舐めしゃぶる。

「やめ、」

足を閉じて震える俺と、俺の耳朶に舌を這わせる男。閉じた足の間に挟んだ男の腕が俺自身をなぞり、そしてその根元につけられた金具を小さく揺らす。

耳の中に直接流し込まれる音は、いつも寝室で頭がおかしくなるほど責め立てられているときに聞こえる音とぞっとするぐらい似ていて、その既視感に頭が沸騰して少しずつ考える力が失われてゆく。

かわいそうに。輪を作った指で緩く立ち上がった俺自身を撫でる男の首筋に、両手を回して縋りつく俺。自分の吐く息がまるで興奮した犬みたいだ、なんて考えられたのは一瞬だけで、チチチとかすかな音を立てて下げられたジッパーと、その隙間から滑りこんできた冷たい手に、〝直接〟肌を撫でられて男の首に縋りつく手に知らず力がこもる。

微かなぬめりを零す俺自身の先端を爪でくすぐった指は、そのまま形を確かめるように幹を辿り、そして奥にある孔の入り口へとたどり着く。

「遮るものがないから、いいですね」

君のここにも簡単に触れられる。孔のふちをくすぐる指は、そのまま するりとパンツの合わせから抜け出すと、ハアハアと短く息をつく俺の唇にあてられる。

舐めて、と耳の中に直接吹き込まれる言葉の意味を俺が頭で理解するまえに、薄く開いたままの唇が男の指を迎え入れてしまう。

唾液がたまる口の中。上あごをくすぐり、粘膜を撫でて、たっぷりと唾液を絡ませた指先は、瞬く間に再び隙間へするりと滑り込んでくる。

ぬるつく指先は、ふちをぐるりと一周したあと、そのままつぷりと中へもぐりこみ、粘膜の隆起を楽しむようにあちらこちらを撫でさする。

ぐちぐちと粘ついた液体を混ぜるような音が、頭の中に流れ込んでくる。

音の出どころがかき混ぜられている下肢なのか、それとも男の舌が這いまわる耳元なのかさえも分からなくなった俺は、ただただ縋るように男の首元に縋りつく腕に力を籠める。

男から与えられる身体の奥底に眠る熱を呼びさますような、直接的で暴力的な悦楽。

男の指に慣れた身体は簡単に熱をもち、首筋をくすぐるような甘い快感は頭の中をどろどろに溶かしてゆく。

パーティーの支度中、ちょっとした趣向ですよと、囁いた男は、裸の俺にシャツをはおらせ、ボタンを一つ一つ丁寧にとめた後、下肢に何もまとわせぬままスーツのパンツに足を通させる。

遮るものがないので、おいたをしないようにコレもつけておきましょうね。パンツを足にくぐらせた後、それを引き上げる前に楽し気に囁いた男が手づからはめた皮の拘束具は、簡単に外れぬようにとご丁寧に根元に鍵までつけられていた。

本文
中略

ティンダロスの猟犬

The Hounds of Tindalos

次にお前を見つけたときには、もう二度と逃がしはしないよ。

両手首と両足首に嵌め込まれた銀の枷。服は擦り切れてボロボロになり、目の下には深い隈が浮いている。

気まぐれだったとは言え、何でこんな見るからに“曰く付き”を助けたのか。

――同類相憐れむだとすれば、自分でもシュールすぎて笑えやしない。

目の前にある、小さな身体。けれどもそれは栄養不足によるものではなく、これから成長していくその途中にあるものだ。

しなやかな筋肉におおわれた身体と、今はぼろ布同然と化した衣服の布地は、この辺では滅多にお目にかかれない上物で、それもまた俺の過去の記憶に紐付き、既視感をちらつかせる。

今をさかのぼること数時間前の夜も更けた深夜、仮住いにしていた俺の家に、見るから
に脱走してきたと言わんばかりの子供が飛び込んできた。
ガタンと耳障りな音を立てて室内に侵入してきた人影に、思わず剣を抜きそうになった
のは、俺が過去に疚しい傷を持つため、常にそういった急な来訪者の影に怯えているから
に他ならない。
けれどもそんな俺が抜きかけた剣から手を離し、飛び込んできたときの勢いのまま抱き
ついてきた子供を受け止めるために腕を広げたのは、その子供の眼があまりに過去の自分
のそれと似ていたからだ。
さらにいえば、腕の中にすっぽり納まるくらい小さな子供の、両手足に嵌め込まれた枷
にもまた見覚えがあった。
それは、この広い帝国領土の丁度中心部に位置する、帝国軍の士官候補生を育てるため
に作られたアカデミーで厳罰を食らったとき、独房へ放り込まれると同時に架せられる枷
だ。
アカデミーに籍を置く者たちは、ほとんど全てが心技体のいずれかに優れている。
中でも体術に自信のあるものが多いために、技を使って独房から抜け出さぬよう、罰を
受ける者は皆、帝国軍オリジナルの枷を両手足首に嵌め込まれる。
どれだけ力を入れてもピクリともしない、忌々しい帝国軍オリジナルの枷は、特殊な鍵

でなければ開けることができない。
それを開け閉めする権限を得ているのは、軍の上層部に位置する場所にいる一握りの人間だけで、鍵を持たない者が無理をして枷を外そうとすれば、枷は即座に爆発する仕掛けをもつ、非常に厄介な代物だった。
そもそもアカデミーに入れる人間は、帝国領土内でも選ばれた人間のみだ。
無能はアカデミー内に足を踏み入れることすらかなわない。だからこそアカデミーに在籍する生徒は自分に誇りを持ち、それ故帝国軍に絶対の忠誠を誓う。
軍の意思に反することを行うことは、すなわちアカデミーからの退校を意味する。
アカデミーはあくまで軍の直属の機関であり、軍規反する者を飼うほどお優しくはない。だからアカデミーでは懲罰を受けるものの数も極端に少ない。
懲罰を受ける生徒のほとんどを、半ば攫われるようにして親元から引き離されアカデミーに放り込まれた生徒か、その能力を見出した親によって軍に売られた生徒が占める。
そういった生徒は軍に反抗的であるが、他のペーパーテストなどをクリアした平均的なアカデミー生よりはよほど“使える”人材が多い。なのでアカデミーはその跳ねっ返りたちを放校せずに、独房で飼いならし軍の意に沿う様に調教し直して優秀な士官を作り出す。
現在将校といった幹部クラスの位に着く人間のほとんどが、昔何度も独房に放り込まれた人間だと聞く。

アカデミー内で独房に入ること、それは懲罰を受けるのと同時に、軍に将来を期待された人間であることを証明する一つの手段となっている。
軍は使えない人間を飼うほどお優しくはない。
だから不要な人間や、反抗的な人間、軍に相応しくない人間は、たとえそれが高官の子息であったとしても、即刻退校を命じる。
退校させられずに、独房に放り込まれ、飼いならされる人間。その者たちは軍が多少の時間と労力を要しても、存在を軍にとどめておきたいと思っていることを指す。それはすなわち彼らが軍に認められているということを示し、将来は将校や隊長などといった幹部クラスの役職に名を連ねることを約束されたに等しい。

勢いのまま飛び込み、腕の中に納まって震える子供の手足で擦れて煩く鳴る枷に見覚えがあるのは、かつて俺がその枷によって始終拘束されていたからだ。
何十回とアカデミーから脱走しようとし、その度に独房へ枷をかけられ閉じ込められては、連れ戻された過去。
独房から俺を連れ出す担当官は、いつも決まってあの男だった。
アドルフ＝ルイステン
あの頃、俺がまだアカデミーにいた頃は、第一隊隊長だった男。

確かその当時、最年少で第一隊隊長に上り詰めた天才だと噂されていた。
一般人の背丈を優に越す俺より、さらに高いそれを持つ男。それでいて肉付きは痩せ気味の俺と変わらないぐらいか、それよりも少しがっしりした程度でしかなく、顔立ちは精巧につくられた人形のようなと喩えるに相応しい、一目見たら生涯忘れられないほど美しく整った男、それがアドルフ＝ルイステンという男だった。
その男の傍にいたくなくて逃げ出した日のことを、今でもまるでついさっき起こった出来事のように、鮮明に思い出すことが出来る。
――全て飲み込まれてしまう気がしたのだ。
自分の意思も、考え方も選択肢も、何もかも全て。身体でさえ自分のものでなくなるような気がした。
そしてそんな風に男によって蝕まれていく自身を俺が止めるでもなく、むしろ全てを男に飲み込まれて一つにさせられてしまうそれを、自分が快感として受け入れていたこと。
それが何よりの恐怖だった。――だから、逃げた。

右手の人差し指の爪だけを少し伸ばしてヤスリで尖らせ、その爪でアドルフの喉元を掻き切った。
アドルフが倒れた床はすぐに血溜まりとなったけれど、そんなことなど気にも留めず、

本文
中略

パブロフの犬

The Pavlov's dog

目に見える檻に入れられ、飼われるのならばまだ良かった。
飼われるのではなく――　れてしまったのならば、檻が無くなったとてもう二度と逃げ出すことなど、できはしないのだから。

ギシリと音を立てて軋むベッドと、床にずり落ちたデュペ。
質の高い、使い込まれた家具が美しく並べられた室内には、もうずっと長い間衣摺れの音と、そして熱に浮かされたような忙しない呼吸音が満ちている。

胎の中に突き入れてかき混ぜる指先に、まるで誘うようにまとわりつく粘膜の感触を、指先で余す所なく愉しんでいた男――アドルフ ルイステンは、二本の指を開いて、どろどろに溶かした中を覗き込むように片目を瞑り、視界に映る滴り落ちる粘液に眼を細める。
アドルフの指が翻(ひるがえ)り、ぶちゅりと、胎内で粘液が弾け飛んだような音が聞こえた瞬間、びくりと背を振るわせたのは、抜けるように白い肌の色をした男だ。
男は、はぁはあと忙しない息を吐きながら、それこそまるで獣の交尾みたく膝を付いた

四つん這いの姿勢のまま、ベッドに組み伏せられている。

「フェイラン」

胎の中で指を蠢(うごめ)かせながら、アドルフが男の耳元に唇を寄せる。

軍に連れ戻され、アドルフの部屋に軟禁されてからというもの、男――フェイランは夜になれば必ずと言っていいほど身体を好き勝手に使われている。

まずは飼い主が誰だか、きちんと思い出させないといけないからね。

五年にも渡る逃亡生活で、元々それほど肉付きがよいわけではなかった身体を更に薄くしたフェイランの、全てを確かめるように隅から隅まで視線と手と舌を這わせたアドルフ。逃亡する前にも身体の関係を持ったことはあったが、これほどまでに執拗に触れられ、また舐められたことはなかったために、フェイランはありとあらゆる所に触れようとするアドルフに戸惑い、ろくな抵抗もできぬままその手管に溺れている。

性欲を発散させるためだけに触れるには、あまりに執拗で、躾なおしと証するには、あまりに甘ったるい触れ合いは、フェイランの頭の中をゆっくりと溶かしてゆく。

腰骨に添えた手をそのまま上へ滑らせて、腹の方へゆっくりとまわったそれは、あばらの一本いっぽんを確かめるようになぞりながら、さらに上へと這い上がる。

順調にするりするりと肌理を味わうように触れていた指先は、けれども唐突にピンと立ち上がる乳首にひっかかってとまってしまう。

検分するように胸元で立ち上がった乳首を掴まれて、びくりと背をしならせるフェイランに、クスリと嗤うアドルフ。そのまま胸の先をカリカリとくすぐる爪に反応して、フェイランのそこが少しずつ盛り上がってくる。

身体中を走る快感を逃がすように足の先をきゅうと丸めるフェイランの耳元で、上手に感じられるようになったじゃないか、と毒のような言葉を吹き込むアドルフ。

「少し触っただけなのに――こんなに腫れている」

言いながら咎めるように胸の先を摘むアドルフの手の甲に、物言わぬ反撃のように爪を立てるフェイラン。そんなフェイランの指を掴んで、

「自分でも触ってごらん」

そのまま自分自身の胸元へ押しつけ、はやくしなきゃ、ここはずっとこのままだよ、と囁き、更には知らしめるように胎内に埋めた指先で、フェイランの弱いしこりを擦り上げるアドルフ。

ぐちゅぐちゅと音がするほど激しく中をかき混ぜられて、ああ、と悲鳴のようなか細い声を上げながら、崩れ落ちそうになるフェイランに、アドルフは、はやくと耳朶に舌を這わせながら、フェイランの指先を自分の指で掴んで、いつも自分が弄るのと同じように、

そこに爪を立てさせる。

くそ、

小さな悪態を零したフェイランは、その後恐る恐る自分の胸に添えた指先に力を入れて、そこを摘んでみせる。

以前は触れられても、何も感じなかったそれが、気がつけば少し擦られるだけで、ぞくぞくと痺れるような快感をもたらすようになったことにフェイラン自身が気づいたのは、少し前のことだった。

まるで女の子みたいだね。

指先で執拗に胸を弄られ、表面を舐めしゃぶられ、ギリと強く噛まれ、少しずつ毒を流し込まれるようにして身体をつくり変えられたのだと気がついた時には、もう既に取り返しが付かないところまできてしまっていた。

アドルフが囁いた言葉の通り、まるで女のように胸を舐められるだけで息が短くなり眼が潤む自分が、忌々しくてどうしようもないと、そう思っていたのに――なのに今日は、そこを自分自身で弄るだなんて、頭がおかしくなりそうだ。

そろりと触れては、ほんの僅かな力で摘まみ上げ、できるだけ感じないようにと振る舞うフェイランに、いいこだね、と甘やかすような声音で囁いたアドルフは、良く出来たご褒美に私も可愛がってあげよう、というが早いか、今まで四つん這いにさせて好き勝手弄っ

本文
中略

シャンタク鳥

The Shantaks

ついにあの男が帰ってきたらしい。
帝国軍部にざわめきと共に齎(もたら)されたひとつの噂。
噂の主は、極秘遠方監視員という在りもしない任務を完遂したその功績を称えられ、再び飼い主の傍に席を与えられたのだという。
アドルフ大佐の狗。
かつてそんな風に呼ばれていた男は、確かにアドルフの命のみを着実に遂行する優秀な猟犬(ハウンドドック)とも――そしてまたまた飼い主の足下に跪き、寵を乞う愛玩犬(ペット)とも見られていた。

カツカツと硬い靴底が床を叩く音を響かせて、帝国軍きっての切れ者と持て囃される男、アドルフが、彼の腹心の部下を伴って、軍部の自室へと続く廊下に姿を見せる。
いつも決まった時間に軍部へと姿を見せるアドルフの、氷のようなと称される冷たく整った容貌は、年々より完成された美しさへと近づき、見る者の視線を奪う。
「〝彼〟の調子はどうですか？」
アドルフの部下である男、ユリウスが少し前を歩く上司ににこやかに尋ねる。

他意など欠片もありませんという様な喰えない顔で笑う男に、隣を歩くもう一人の部下、リチャードが小さく息を吐く。

「どう、と言うと？」

美しく整った顔（かんばせ）に薄い笑みを刷（は）いて、ユリウスを振り返るアドルフの緩く弧を描く瞳は、よくよく覗き込めばその奥をぞっとするほど凍てつかせている。

一週間ほど前にアドルフ自ら、軍の本部がある街から遠く離れた片田舎までわざわざ迎えに行った存在。

偶然居場所が見つかったと思っているらしい彼は、なぜあんな片田舎の、更には人気の無い所に隠れて建つような物置小屋も同然の隠れ家に、かつての自分と全く同じ枷をかけられ、更にはアカデミーに属していたときの自分と全く同じポジションに収まる人間が飛び込んできたのかを、正しく理解できていない。

第一隊と呼ばれる、軍部でも選りすぐりのメンバーを招集し、わざわざあのような辺境くんだりまで足を運ぶ理由。

それがたかだかアカデミーの任務の最中に脱走した一生徒（いちせいと）を確保するためだけのはずもなく、――本当はアドルフの喉元を掻き切ってアカデミーを脱走した男を、生け捕りにするためだと知ったら、彼は一体どんな顔をするだろうかと、思考を巡らせるユリウス。

彼が戦々恐々と過ごした五年という月日の全てを、アドルフによって監視されていたのだと知ったら、――彼は一体どんな表情を浮かべて、アドルフを見やるのだろうか。

ユリウスには少しも懐かない、むしろ飼い主であるアドルフ以外には少しの気も許さない猟犬は、ユリウスにとって捨て置くことのできない存在だ。

――なぜならその猟犬を、ユリウスの上司でもある飼い主が、これ以上ないほど気に入り、執着しているからだ。

「〝あれ〟はうまく馴染んだのかな、と」

己の首骨を指差しながら、アドルフを見つめるユリウス。

「おかげさまでね」

そんなユリウスにチラと視線を向けたあと、それをここではないどこか遠くへと向けたアドルフ。誰に聞くまでもない。逸らされた視線の先に浮かぶのは、――アドルフ直々に彼の腕の中へと囲い戻された男の姿だ。

〝向こう〟に帰ったら、飼い主が一目で分かる首輪に、帝国軍第一級犯用の鎖を繋いで特別にリード代わりにしてあげよう。

男に向かって謳うように囁いたアドルフは、その言葉通り私邸に戻るなり、男のために特注の首輪をあつらえた。

それも誂えられた首輪は、ただの首元に巻き付く皮の首輪などではなく、飼い主が一目

本文
中略

くらいところにすむけもの

Beasts lurking in the dark

罠にかかったのは、果たしてだれ？

繁華街の雑踏は、どんな人間にも平等に興味が無い。

赤く頬を上気させた酔っ払いも、青ざめた顔色した女子高生も、クスリでラリってトンでる奴も、何もかも平等に呑み込んでいく。

数えるのも億劫になるほどの人々が、次々とあちこちの店に吸い込まれては吐き出され、その度にネオンの光が届かない仄暗い場所で、ほんの僅かな諍いが起る。

喧嘩、カツアゲ、リンチ。通りすがる奴らは、脇道で起るそれらに気がついているけれど、"知らないフリ"をして通り過ぎて行く。それもそうだろう。好き好んでこんな厄介事に顔を突っ込む奴はいない。ただし、――"それ"を飯の種にしている、俺たちを除いて、の話ではあるが。

店が建ち並ぶ大通りから一本逸れた脇道。スプレーで落書きされた壁に背を預けて、光の届かない場所にのこのこと迷い込んでくるカモを待つ。

フラフラした足取りで、昏い道に迷い込む酔っ払い。男が身に纏うスーツのブランドを

見て、汚い地面に座り込んでいた仲間ふたりが唇の端を吊り上げる。
仲間の一人が立ち上がり、ふらつく酔っ払いの肩にすれ違い様にぶつかる。痛てえ、と態とらしい声をあげ、振り向き様に酔っ払いの胸ぐらを掴み上げる。
何をするんだ、やめなさい。震える酔っ払いの声が、暗い路地に溶けて消える。すぐそこには光と音で溢れかえる大通りがあるのに、一本脇道に逸れただけのここは、こんなにも静まり返っている。
おっさんのせいで、俺の肩イカレちまったじゃねえかよ。どうしてくれるわけ？なあ？
低く唸るような仲間の声に、酔っ払いはヒイと情けない声をあげて震えている。その無様な姿にケタケタ嗤い声をあげる俺の背後に座るもう一人の仲間である男。多勢に無勢。まるでライオンが獲物を甚振って捕食するように、仲間は目の前の酔っ払いを追い詰める。
「た、助けてくれ、」
喉元を締められている酔っ払いの声は、とても微かなものだった。
誰も助けちゃくれねえよ、震える酔っ払いの声を、嗤い声が掻き消して行く。
ガタガタみっともなく震える男は、軽く脅して強請れば、そのスーツに見合う額を落として逃げて行くだろう。
それで今晩の"狩り"は終わりだ。スリルも興奮も、欠片も感じることなく終わるそれは、まるで一種の事務作業のように味気ない。

この後そのまま飲みに行って、クラブに流れて、朝まで音にのまれて始発で帰るか。頭の中で考えていた次のプラン。目の前の男になど、最早欠片も興味は無く、何事もなく終わるはずだった。

けれど、男の零したたった一言が、俺たちの――否、俺の運命を変えることになるとは。

「助けてくれ、　　」

掠れきった声で男が誰かの名前を呼んだ気がした、――その瞬間、暗闇の中から一人男が現れる。

まるで暗闇から這い出したかの如く現れたのは、皺一つ無い黒いスーツを身に纏った、目を見張るような整った顔をした男だ。

男は冷めた目つきで、自分を呼んだ男を掴み上げる俺の仲間に視線を投げると、そのまま節くれ立った指先で、目元を隠す眼鏡のフレームに触れ、そしてそのままその手をゆっくりと口元に運ぶ。

男の掌で隠される前に微かに見えた口元は、この状況にも拘らずどこか愉しげに歪んでいた気がして、その得体の知れなさに俺の背筋を一筋冷たい雫が伝い落ちる。

歪む唇と、爪先まで美しく整った指。シャープな顎とレンズの向こう側で瞬く瞳に、頭

の奥で既視感のようなものが微かに揺れる。けれどそれに意識を向ける余裕は、男が音も無く動き、そして酔っ払いを掴み上げる俺の仲間を蹴り飛ばしたのを見た瞬間、跡形も無く消え去った。

目にも留まらぬ、とはまさしくこの事だと言わんばかりの男の蹴りの早さに、俺も俺の背後に居る他の仲間も誰一人として動くことが出来なかった。

男の蹴りをまともに受けた仲間は、ガンと鈍い音を立ててフェンスに激突する。そのまま身体は起き上がることなく、それどころかズルズルと電池の切れた人形のように壁を伝って地面にずり落ちて行く。

呻き声一つ上げることなく、意識を失った仲間。それを横目で見ながら、俺とその他の仲間は目の前の黒いスーツを纏った男に意識を向ける。

潰せ、こいつは"敵"だ。

仲間に目配せし、男に飛びかかるタイミングを計る。

今だ。

吸い込む息を合わせ、飛びかかろうと準備し、瞬き一つして、目を開いた瞬間――俺の背後に立っていた仲間のコメカミに、男のストレートが叩き込まれる。

な、

小さな呻き声をあげた仲間は、目を見開いて口から泡のような唾の塊を吹いて倒れてい

く。

慈悲のかけらすら見せずに、真っ直ぐに振り抜かれた男の右腕。避けるどころか、気づくことすらできなかった男のそれが、今度は俺に向かって伸びてくる。

ジャリと男の足下のアスファルトが鳴き声を上げたと思えば、その刹那、俺の喉元に男の指先が絡み付き、そのまま後ろの壁に腕一歩で押し付けられる。

避ける為に重心をずらしていたにも拘らず、まるで猫の子を掴み上げるようにいとも簡単に急所をその手の中に握られて、そのなす術のなさにギリっつと奥歯を強く噛みしめる。

ギリギリと圧迫される喉元から生まれる苦痛で、生理的な涙が目尻に浮かぶ。ヒュウヒュウと無様に擦れた呼吸音の全てを聞き取ろうとするみたいに、男が俺との距離をぐっと縮めてくる。

目の前に迫る硬質な容貌から逃れたくて、喉元を締め上げる男の手に爪を立て、足下をばたつかせて暴れてみせる。

立てた爪が男の皮膚を破る感覚がしたけれど、男は顔色一つ変えずに——それどこか、口元に笑みさえ浮かべて、まるで俺の目の中を覗き込むように顔を近づけてくる。

「　　」
男の薄い唇が、――名乗ってもいない、俺の名前を象る。

どうして。
目を見開いて目の前の男を凝視する俺に、男は空いている手で目元を覆う眼鏡を外して、一言、
「まだ気付かないのか？」
そう言って、低い嗤い声を立てる。

眼鏡を外した男の顔。
目尻に一つ、ぽつりと浮かぶ婀娜めいたホクロ。
硬質な容貌。
――頭の中で揺れる、既視感のような、何か、

まさか、
辿り着いた答えが、どうしても信じがたくて、目の前で自分の首を締め上げる男を凝視する俺。その俺の口が勝手に動き、擦れた声で目の前の男を呼ぶ。

本文
中略

シュレディンガーの猫

The Schrodinger's cat

本文
中略

ここがいいだろう？

顎先を舌で辿りながら、咥内に吹き込むように落とされた言葉に、頭の芯が焼け付いた。兄の言葉に、どこが、と吐き捨てようと口を開きかけた俺。そのタイミングを見計らって、兄は誰も知るはずのない、俺の身体の奥底のよわい所をピンポイントで擦り上げる。

ぐちゅんと粘ついた音を立てて胎の奥深くまで潜り込んだ熱の塊を歓迎するように、中の襞（ひだ）がまとわりついている。硬く反り返った塊を舐めしゃぶるように蠢（うごめ）く襞。その襞の奥をぬるついた先端が押し開く。

「こんなにして」

はあ、と熱い息を吹きかけながら、俺の髪を思いきり掴み上げる兄。脱色を繰り返し、ぱさついて色の抜け落ちたそれは、兄の手の中でぶちっと音を立てて千切れていく。

「――ワルいコだ」

髪を掴まれたまま、ずるりと勢いよく胎の中に埋められていた杭を引き抜かれ、張り出したエラで、触れられるだけで背筋があわだつような感覚を味わわさせるしこりを思いきり潰される。

ああ、と悲鳴のような嬌声をあげる俺に、オニイチャンが躾てやるからな、と甘ったるい声をふりかけて嗤う男は、今にも抜けそうなほど引き抜いた杭を、じゅぶっと耳を防ぎたくなるような粘ついた音を立てて再び俺の胎に突き戻した。

次に眼が覚めた時は、先ほどの目覚めよりはいくらかマシだった。
好き勝手された身体はギシギシと軋んで悲鳴を上げていたけれど、それでも先ほどの頭の芯が焼き切れるような暴力的な快感で、強制的に目覚めさせられたわけではないだけまだ良かった。
腹をシーツにつけて、枕に頬を埋めて伏せた状態のまま意識を失っていた俺が、意識を取り戻し、ゆっくりと焦点を結ばせた視線の先にいたのは、頭の天辺から足の先までを隙のひとつもない完璧なスーツに身を包み、優雅な仕草でカップを傾ける兄だった。
こちらを流し見るようにしながら、喉を鳴らして紅茶を呑む姿は、優雅さと野生味が同居する何ともアンバランスな出で立ちだったが、悔しいかなダイヤモンドのように硬質に整った顔立ちをした男には良く似合っていた。
目が覚めたか。
すっと流れるような動作で椅子から身体を浮かせ、こちらへ歩みよってくる兄。俺に向かって伸ばされる手から逃れたいと思うけれど、散々好き勝手された身体は碌(ろく)に言うことも聞かない。ならばせめて視線だけでもと、ぎっと睨みつけた俺を、目元の婀娜(あだ)めいたホクロを歪めながら嗤っていなした兄は、伸ばした手で俺の髪を梳き、そのまま身体の線を辿って下肢へと指先を滑らせる。

するりと肌の上を滑る指先は、さんざんひらかれた尻のあわいに差し込まれ、指で淵を広げるようにひらかれる。

その瞬間――中からどろりと零れ出した粘ついた液体が、太ももを伝ってシーツに零れ落ちたのを感じて、カッと頬に血が上る。まるで犯された証拠を見せつけるみたいに、差し込んだ指先で中に出した白濁をかきだす男。ふふと小さな声で嗤い、身体の中を好き勝手にかき混ぜる男の指先から死ぬほど逃れたいと願うものの、指の一本たりとも動かす気力が湧いてこないのだから、一体この兄であった男は俺の身体をどれほど貪っていたと言うのだろうか。

どうして。乾いてひりつく口を開いた俺に、兄はうっそりと笑い、微かに首を傾げてみせる。

真っ直ぐに俺を見つめながら、けれども答えを返すために口を開こうとはしない兄は、中に差し込んだ指をひらめかせて、ぐちゅぐちゅと音を立てている。胎の奥にある触れられた瞬間に、前からはしたなく涎を垂らしてしまうしこりを、カリカリと爪先で悪戯に弄ぶ兄は、ひっひっと情けない声をあげる俺の耳元に唇をつけて、囁きをひとつ落とし込む。

もとの生活に戻りたいか？

まるで犬の喉を撫でるような仕草で、俺の中を擦る兄の指。その指に頭の中を溶かされ

ながらも、吹き込まれた声にコクコクと頷いた俺に、兄はぞっとするほど完璧な笑みを浮かべ、ゆっくりと口を開く。

「なら俺とひとつ賭けをしよう」

お前が勝ったら、もとの生活に戻してやる。

甘ったるい声が耳の中へと流れ込んでくる。その声から逃れようと首を振った俺の顎を、胎の中から抜き取った指で押さえつけて、無理矢理視線をあわせる兄は、

「ただし俺が勝ったら、お前は二度と同じ世界には戻さない」

ここで一生俺と暮らすんだ。

そう囁きながら、空いていたもう片方の手に摘んだ"玩具(がんぐ)"を揺らしてみせた。

カタカタ揺れる車内と、その振動よりもさらに細かく振動する、胎の中に無理矢理押し込まれた玩具。

初めは異物を入れられた感覚に嘔吐感すら覚えたが、少し時間が経って体温が移り、中に馴染んできだすとその感覚はいつのまにか消え去り、後に残るのは不快感とも快感とも付かない違和感だった。

車の振動でごろりと時折胎内でうごめき位置を変えるそれが、不意によわいところを掠

本文
中略

ご購入いただき、ありがとうございます！

自分の好きな執着攻めと平凡受けの話を
これでもかというぐらい詰め込みました。
楽しんでいただけたら幸いです。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

松本

執着攻めと平凡受けの短編集１

発行：2020.06.27
発行： ATLANTA
発行者：松本 / pixiv id : 1864588

この作品はフィクションです。
実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。
本書の著作権は著者に帰属します。
本書の一部、または全部を無断で転載、複製、改変、
またはインターネットオークションへの出品などを行うことは禁じています。